

蝶の博物詩

生態45

蝶の名前



コムラサキ
(1996年7月22日 黒姫山)

photo by

Nishiyama



スミナガシ
(2006年8月21日 野尻湖)

蝶の博物詩

生態45

蝶の名前

小学生のころ、出たばかりの『原色千種昆虫図譜』（平山修次郎著）を買ってもらい、ボロボロになるまで読み込み、同時に蝶の採集、標本づくりに夢中になった。当時は台湾、朝鮮の蝶を含んでいたとしても、日本の蝶250種程度を記憶するのは簡単であった。戦争中、捕虫網を持って歩くと白い眼でみられたので、折りたたみ式の網と継ぎ竿を自作、無人の高尾山に通って楽しかった。敗戦、そして大学に入り、皮膚科医となつてから昆虫とはほとんど縁がなく、蝶と再会したのは停年のころであった。半世紀の空白があったにも関わらず、蝶の名前を思い出すのに困難はなかった。皮膚病名や薬剤名は簡単に忘却するのに、記憶とは勝手なものである。驚くべきことに50年間、蝶の名前がまったく変わっていないことも幸いした。

昆虫の名前には皮膚病名と同じように、学名と和名がある。学名は万国共通で、国際的な命名規約に則り、ラテン語で記載される。普通は属、種のみを記し、その後に命名者、記載年がくる。これに対して和名には先取権はなく、名付け人もわからず、昔からの言い伝えやアマチュアの発案に基づくものも少なくない。たとえば、現在の国蝶であるオオムラサキなども、かつては鎧蝶と呼ばれていたそうである。地方差や学閥の違いによる混乱を避けるために、もっとも広く使用され、学会でも認知されている名前を標準和名 (common name) と呼ぶ。どんなに小さな“つまらない”虫にも和名をつけている国は日本以外にない。

外国でも日常しばしば目にし、特徴のある蝶には名がある。英名でキアゲハはThe Swallow Tail, クロアゲハはThe Spangle, モンシロチョウはThe Small White, ドイツ名でキベリタテハはTrauermantel (喪服), クジャクチョウは文字通りTagpfauenauge (孔雀) などの名前は誰でも知っている。一方、蝶の学名のラテン語はドイツのギムナジウムではギリシャ語とともに必須科目であるので、蝶の愛好者でなくとも学名を理解し、話を通じることに驚く。蝶の学名はギリシャ神話に典拠していることが多いからであろう。

日光の当たり具合で、雄の翅表が美しい紫色に輝くコムラサキは、小さなムラサキ (タテハ) という意味であり、片仮名では何のことはないが、小紫となると俄然色っぽくなる。コツバメ (小燕), コミスジ (小三筋) もよい。コムラサキと同じタテハチョウの一種のスミナガシ (写真) も、流水に墨を流して模様の変化を楽しんだ古人の風雅を偲ばせる。

一方、差別用語であるとして和名の変更を迫られた昆虫もいる。肥前虫、南京虫、メクラカメムシ、メクラアブ、魚類ではイザリウオ、植物ではヘクソカズラ、ママコノシリヌグイなどなど、実際の差別とは無関係の不当な言葉狩りが流行した。ついにながら、60年前、Bonn大学皮膚科小児病棟で、顔に内因性湿疹 (現在はアトピー性皮膚炎という) のある小児が、腕の母斑 (Muttermal) を“母のくれたAndenken (思い出)”と喜んでみせてくれたことを思い出した。

西山茂夫